

# 学位論文要旨

学位論文題目 日本語自然会話における「話者間反復」に関する研究

申請者氏名 常艶麗

日本語の自然会話においては様々な反復現象が見られる。これらの反復現象は「繰り返し」、「反復」と呼ばれ、従来一括して研究されてきた。特に会話分析の研究分野では、「繰り返し」と呼ぶことが多いが、「反復」と「繰り返し」が区別されて扱われることはない。その中に、ある話者の発話末尾文にある要素が、次の話者の発話冒頭文に現れるような反復現象（「話者間反復」と呼ぶ）が観察される。

従来の反復現象に関する研究は、主に反復の機能を探究するものであった。しかし、機能的な観点だけからでは、なぜ特定の要素だけが反復されるのかという問題については、十分な解答が得られたとは言えないだろう。

そこで、本稿では、日本語自然会話を対象とし、「先行発話のどの要素が選択されて話者間反復が起こるのか、なぜ特定の要素だけが選択されて話者間反復が起こるのか」という問題を解明することを目的とし、その理由解明への第一歩として、形態的・統語的・談話的な観点から複合的に記述していくことを目指す。この3つの観点から観察することで、話者間反復が起こる要素を選ぶ際、話者の中にどのような制約が存在するのか、制約同士はどのように相互作用しているのかを明らかにしていく。制約同士の相互作用によって、特定の要素が選ばれ話者間反復が起こるのではないかという仮説を立てて検証していく。

話者間反復の現象を同時にこれら3つの観点から記述したものは管見の限りないことから、新たなアプローチによって、この現象に潜む仕組みを解明できるのではないかと考える。

考察するにあたっては、2種類の会話データを利用した。それは、筆者独自で行った調査による会話データと、BTSJ コーパスから抽出した会話データである。また、記述の枠組みとして最適性理論の考え方を利用した。それは、話者間反復が起こる要素が選ばれる際に、いくつかの候補が設定され、これらの候補の中から制約によって最適な候補が選ばれ、それが最終的に反復されるという考え方である。

会話データの分析の結果、話者間反復現象に関する形態的・統語的・談話的な制約が得られた。まず、形態的な制約では、定性あるいは独立性が相対的に高い要素が反復されることが分かった。例えば、疑問詞(名詞)は定性が相対的に低いため、反復されにくいのである。次に、統語的な制約では、文末に相対的に近い要素が反復されることが判

明した。このことから、反復される要素は「文末への指向性」を持っていると考えられる。最後に、談話的な制約では、話題となる要素が反復されることが明らかになった。このことから、話者間反復には、話題の継続、展開、提示など、談話構成上の機能が働いていると推測できる。

最終的には、話者間反復という現象は、1つの領域の制約だけが関与しているものではなく、形態的・統語的・談話的といった3つの制約の相互作用によって生じることが判明した。

本研究での3つの観点からの記述や制約は、少なくとも先行研究の意味・機能的アプローチを補うものであり、それゆえ非常に意義があるものであると考える。多面的なアプローチによって、話者間反復という現象に潜む仕組みを解明するための、新たな一步を踏み出したのではないかと考える。また、本稿で扱った話者間反復は単なる反復現象の一種類であるが、本稿での分析結果から予測すると、反復現象が異なる側面に関わっていることが予想できる。従って、本稿に基づく今後の研究の最終的な目的は、反復現象に関わる普遍的なルールを仮定することになる。今後も他の反復現象の研究を継続するとともに、反復現象を包括的に分析していくことが課題である。

## 学位論文審査の概要と結果

|      |                          |     |      |
|------|--------------------------|-----|------|
| 報告番号 | 東アジア博 甲 第 159 号          | 氏 名 | 常 艶麗 |
| 論文題目 | 日本語自然会話における「話者間反復」に関する研究 |     |      |

**(論文審査概要)**

まず、本論文の概要を以下に述べる。

本論文の目的は、日本語の自然会話において、ある話者 A の発話末尾部の要素が次の話者 B の発話冒頭部で反復される現象（「話者間反復」と呼ぶ）を対象とし、「なぜ特定の要素を反復するのか」といった話者 B の脳/心内の言語計算の仕組みを解明することにある。分析対象の言語データは、筆者自らが収集したもの、及び「BTSJ 日本語自然会話コーパス」を利用しており、信頼性は確保されている。分析に際しては、最適性理論(Optimality Theory)の枠組みを応用している。これは、従来のルールによるアプローチとは異なり、複数の制約が適用されることによって、相対的に最適なアウトプットを得ようとする考え方である。

本論文の構成は次の通りである。第 1 章は研究の目的、第 2 章は先行研究、第 3 章は本論文の立場、第 4 章は本論文で扱う会話データについて述べている。第 5 章が分析であるが、反復される要素の品詞（名詞、動詞、形容詞）によって下位分類されている。また、反復される候補となる要素の数、文の種類（主節・従属節・倒置文）、格成分・述語成分によっても分類し、それぞれ詳細な会話データの分析を行っている。第 6 章では、話者間反復の形態的・統語的・談話的な制約をまとめている。第 7 章では、問題点・今後の課題について書いてある。会話データに関する問題、話者間反復に関する問題、最適性理論に関する問題を詳細に取り上げている。第 8 章は「おわりに」で、認知心理学や日本語教育への応用可能性について述べられている。付録として、収集した会話データをすべて文字化したものが電子ファイルの形で付けられている。

最終的な結論としては、話者間反復は形態的・統語的・談話的制約の相互作用による現象であることが仮説として提示されている。反復される要素は 1 つに決まっているのではなく、複数の可能性があることを示唆している。実際の会話では、その中で最適な要素が選択されて出現する。本論文では、この仕組みを最適性理論を利用して緻密に検証している。

次に、本論文に関する審査結果を以下に述べる。

**1. 創造性**

従来の説を十分に理解したうえで、新しい論点、仮説、証明方法が付加されており、その新規性について自覚的に表現できていて、当該研究テーマあるいは関連研究分野への貢献が明確である。特に、話者間反復を形態的・統語的・談話的制約の相互作用による現象であると捉えた考え方は非常に斬新であり、極めて優れている。

**2. 論理性**

適正な論証手続きに基づいて仮説を検証するなど、一貫性のある展開から結論が導かれている。大量の言語データを丁寧に分析し、仮説を構築していく流れは、全体として極めて優れていると評価できる。

3. 厳格性

先行研究は十分に渉猟咀嚼されており、質・量ともに十分な証明資料、そして厳格な方法が用いられている。評価は全体として極めて優れている。

4. 発展性

今回提示した仮説は、認知心理学、脳科学、日本語教育、第二言語習得など様々な関連領域に貢献できる可能性を持っている。すなわち、将来大きく発展する可能性のある論点や研究枠組み・視角・方法が萌芽的に提示されている。全体として極めて優れていると評価できる。

以上、審査委員会における審査委員の合議によって全体の評価が「極めて優れている」と判断し、論文審査結果を「合」とする。

論文審査結果

⊕・否

審査委員 主査

(氏名)

有元光彦

(氏名)

中田 亮

(氏名)

山本 牙里

(氏名)

松岡 勝彦

(氏名)

\_\_\_\_\_